

借用語

— その条件とタイプ —

日野資成

0. はじめに

世界の言語をいくつかに分類するとき、異なる言語間でどれだけの語の意味と形式が一致するかということが一つの決め手となる。しかし、その際注意しなければならないのが、「借用語」である。ある言語が別の言語からいくつかの語彙を借用した場合、それらの語彙が互いに似るのは当然で、その場合、二つの言語が同じ種類に属する（同族である）ということとはできない。たとえば、日本語の一（いち）、三（さん）、四（し）は、中国語の一（イー）、三（サン）、四（スー）と音がよく似ているが、だからといって日本語と中国語が同族であるとはいえない。それらの数は、中国語からの借用であるからである。

本稿では、この借用語がどのような条件のもとに起り、どのようなタイプのものがあるのかを検証し、それによって、借用語の見分け方を提示してみたい。

「借用語 (borrowing)」について Crowley (1992: 152) は、「借りた語を返すわけでもないし、貸した語も、貸した言語の中で使わなくなるわけではないので、術語としてふさわしくない」とし、新たに「複写語 (copying)」という術語を提案している。この説も一理あるが、ここでは、広く言語学で用いられ、術語として定着している「借用語」を使うこととする。

Arlotto (1972:184) は「借用」について「ある言語が他の言語から言語的要素を取り入れる過程」と定義している。Hock (1991) はこの「過程」を「言語接触の一般的結果」, 「言語的要素」を「個々の語彙のまとまり」と説明する。したがって, 「借用語」とは, 一般的に「ある言語が他の言語から, 言語接触の結果取り入れられた個々の語彙」と定義することができる。ただし, 第2節でも述べるが, 語彙だけでなく, 文法や形態素, 音韻が借用される場合もある。

「借用」が起る条件の中で最も大きなものは, 1) 言語共同体同士の言語接触である。その他の条件として, 2) 必要性, 3) 言語の特権性, 4) 語彙の範疇などがある。これらの条件について第1節で検討する。また, 第2節では, 言語のどの要素が借用されるかを検討する。これには, 語彙の借用, 文法(語順)の借用, 文法(形態素)の借用, 音韻の借用がある。第3節では借用が言語を分類する際に使われてしまった過去の例を挙げ, 最後に, 借用語を見分ける具体例を示してみたい。

1. 借用の条件

1.1 言語接触

借用は, 一般的に地理的に近い言語共同体同士で起ると言われている。というのは, 人々は遠い共同体よりも近い共同体の方に行きやすいからである。たとえば, 韓国語には *hakkyo* (学校), *shimmun* (新聞) など多くの中国語からの借用語があるが, これは中国と韓国が地理的に近く, 紀元前108年に武王朝が朝鮮半島の北半分を征服したときに中国語が流入したためである。

しかし, 借用は地理的に離れた言語共同体同士にも起る。たとえば, 日本語にはボタン, タバコ, パンなどポルトガルからの借用語が多い。これは, 1542年から1639年の間にポルトガルの宣教師たちによってもたらされた。結局地理的に近いというよりも, 二つの言語共同体同士の人々が接触することによって借用が起るといえる。

強度の接触が長期間にわたって行なわれると、ある地域のいくつかの語族の異なる言語が、一大言語群を形成することがある。これを「言語連合 (Sprachbund, linguistic alliance)」という。たとえば、バルカン地方のルーマニア語 (ロマンス言語)、ブルガリア語・マケドニア語 (スラブ言語)、アルバニア語 (ギリシャ語系) などは、13世紀から17世紀にかけて強度の言語接触があり、その結果、冠詞の後置・与格と属格の融合など、共通の特徴を帯びるに至った (言語学大辞典第6巻, 500-1ページより)。

1.2 必要性

新しい文化や習慣を他の共同体から受け入れる場合、その文化や習慣だけでなく、それを指すことばも必要になる。たとえば、コーヒー (イタリア語の *caffè* より) やタバコ (スペイン語の *tobacco* より) などは、そのものとともにそれを指すことばが世界中に広まっている。

1.3 言語の特権性

Lehmann (1992: 267) は「特権的な言語を習う話者は、それをそのまま獲得すべく社会的圧力がかけられる」と言っている。1066年、ノルマン人がイギリスを征服したとき、英語が膨大な量のフランス語を借用語として受け入れたのは、フランス語が英語よりも特権的言語であったことを表している。次に Jespersen (1938: 87-117) よりその例を挙げる。

政治関係の語

authority (権威), chancellor (首相), council (議会), country (国), crown (王位), minister (大臣), nation (国民), parliament (国会), state (州), people (人民), power (権力), realm (領地), reign (統治する), sovereign (君主),

封建制度関係の語

baron (男爵), baroness (男爵夫人), duchess (公爵夫人), duke (公爵), feudal (封建制), liege (君主), marquis (侯爵), peer (貴族), prince (王

子), vassal (家臣), viscount (子爵),

教会関係の語

altar (祭壇), angel (天使), baptism (洗礼), clergy (牧師), deacon (執事), lord (主), prayer (祈り), religion (宗教), sacrifice (犠牲), saint (聖人), savior (救い主), service (奉仕), testimony (証), trinity (三位一体), virgin (聖母マリア),

軍事関係の語

admiral (海軍将官), arms (武器), armour (よろい), army (軍隊), battle (戦闘), buckler (盾), lieutenant (大尉), navy (海軍), peace (平和), sergeant (軍曹), soldier (兵士), troops (騎兵隊), war (戦争),

法律関係の語

accuse (告発する), attorney (弁護士), court (法廷), crime (罪), defendant (被告), justice (司法), judge (判事), jury (陪審員), plaintiff (原告), plea (抗弁), plead (弁護), sue (告訴する), suit (訴訟), summon (召喚する),

フランス料理関係の語

boil (煮る), dainty (ご馳走), dinner (晚餐), feast (祝宴), fry (炒める), jelly (ゼリー), pastry (パイ, タルト), pasty (肉入りパイ), roast (あぶる), sauce (ソース), sausage (ソーセージ), soup (スープ), supper (夕食), toast (トースト),

1.4 語彙の範疇

1.4.1 文化的語彙と基礎語彙

Crowley (1992: 153) は「基礎語彙よりも文化的語彙のほうが借用されやすい」と述べている。前の1.3で挙げた語はすべて文化的語彙である。日本でも、1639から1868年までの長い鎖国時代の後、明治時代の初め、明治政府は遅れを取り戻すべくヨーロッパの文化を大量に輸入した。その結果、それぞれの文化を指すことばも、借用語として多く日本に流入した。そのとき

流入した語には、ランプ、テーブル、クラブ、バケツ、ガス（燈）、ビールなど多くの語がある。

一方、基礎語彙（代名詞・数字・体の部分の名称・天気・基本的動作・基本的状態を表すことばなど）は借用されにくい。というのは、それらはたいていどこの言語共同体にもあるからである。

1.4.2 名詞に対する動詞・接辞

Ruhlen (1987:12-3) は、名詞は動詞や接辞よりも借用語になりやすいと言っている。Haugen (1950:224) は、ノルウェー・アメリカ人の話すノルウェー語に入ってきた借用語全体の、品詞による比率を次のように示した。

名 詞	75.5%
動 詞	18.4%
形容詞	3.4%
副詞と前置詞	1.2%
感動詞	1.4%
合計	99.9%

名詞は他の品詞よりも借用語として取り入れられやすいといえる。

Bynon (1977:231) は、名詞・動詞・形容詞のような「開かれた」品詞（語彙として新たに作られやすい品詞）の方が、代名詞・接続詞・前置詞のような「閉じた」品詞（語彙として新たに作られにくい品詞）よりも借用されやすいと述べる。しかし、この傾向は、語彙の中で名詞の占める割合がもともと一番高いということ、新たに取り入れられるものに名詞が多いことが原因ではないかとも彼は言っている。

1.4.3 具体的なものと抽象的なもの

Antilla (1972:155) は、借用語には目に見えたり触れたりできる具体的なものが多く、抽象的になればなるほど借用されにくいと述べている。

2. 借用の型

借用のうちほとんどは語彙の借用であるが、そのほかにも文法（語の語順）の借用，文法（形態素）の借用，音韻の借用がある。

2.1 語彙の借用

1節で扱ったもののうち、「開かれた」品詞に属する語はすべて語彙の借用，つまり単語の借用である。

2.2 文法（語順）の借用

前置詞 *of* と名詞で所属を表す英語の用法はフランス語からの借用である。たとえば，*the tail of the cat* (猫のしっぽ) はフランス語の *la queue du chat* (猫のしっぽ) から来ている (The Linguistic Encyclopedia 1991 : 209)。

また，英語の *attorney general* (司法長官) や *court martial* (軍事裁判) などのように形容詞が名詞のあとに来る語順もフランス語からの借用である (Arlotto 1972 : 193)。

さらに，もともとは SVO の語順だったモツ語 (オーストロネシア語族に属する) が SOV の語順になった。これはコイタ語 (オーストロネシア語族ではない) からの借用である (Crowley 1992 : 143-4)。

2.3 文法（形態素）の借用

Autos (自動車) や *Hotels* (ホテル) のようなドイツ語の複数語尾 *-s* は，英語からの借用である (Dictionary of Linguistics 1988 : 67)。また，英語の *criteria* (*criterion* (基準) の複数形)，*alumni* (*alumnus* (男子同窓生) の複数形)，*alumnae* (*alumna* (女子同窓生) の複数形) の複数形語尾 *-a*，*-i*，*-ae* はラテン語からの借用である (Hock 1991 : 387)。

2.4 音韻の借用

英語の rouge [ru:ʒ] の [ʒ] という新しい音素は、フランス語からの借用である (Arlotto 1972:192)。また、中央アジアのトルコ系言語の一つであるカザク語には音素/f/がないが、カザク語話者は flot (はかない) filosof (哲学者) などの単語で/f/を使う傾向がある。これはロシア語からの借用である (Arlotto 1972:193)。

3. 「借用語」が同族語の証拠として扱われた例

Ruhlen (1987:13) は「借用語によって同族語に見える場合があるので注意を要する」といって、タイ言語と中国語の例を挙げる。

音韻的類似と同族語らしく見えるいくつかの語からタイ言語は、中国語と遠い親戚関係にあり、シナチベット語族に属すると考えられていた。現在ではタイ言語はオストロネシア語族に属すると一般的に考えられている。タイ言語とシナチベット言語の語彙が非常に似ているのは、タイ言語の中国語からの借用であることがわかったのである。

さらに、ベトナム語についても、中国語から来ているとか、中国語の方言の一つであると言われていたときがあったが、これもベトナムが紀元前111年から紀元後939年まで中国に支配されていたとき、ベトナム語が中国から多くの語を借用した事実を考えていなかったから起きた間違いである。ベトナム語はモンクメール語族に属する (International Encyclopedia of Linguistics 1992:223)。

4. おわりに

以上、借用が起る条件と、そのタイプについて述べてきた。これらは、二つの言語の類似性を比較する場合、借用語を排除する決め手になる。

まず、借用が起る条件について考えてみよう。二つの言語共同体の人同士

が接触した歴史がある場合、借用語である可能性がある。たとえば、秦・漢の時代に中国から青銅器が伝わった歴史がある。さらに、随・唐の時代にも日本から遣隋使・遣唐使が派遣されている。その交渉の中で、漢数字が借用されるようになったのである。

次に、言語の特権性を考えてみよう。中国と日本とでは、明らかに中国の方が文化が進んでいた。日本はそれをもっぱら大陸から輸入してきた。特権的言語である中国語から、日本語が借用したことは想像に難くない。

最後に語彙の範疇を考えてみよう。一般的には、基礎語彙は借用されにくいと述べてきた。数字も基礎語彙に属し、たいていどの言語共同体にもある。日本にも日本古来の数字があった（ひとつ、ふたつ、みつつなど）。にもかかわらず漢数字が借用されたのは、1.2で述べたように、十以上の数字を表す必要性からではないかと思われる。漢数字の方が音節数が少ない（すべて1音節か2音節である）。したがってその組み合わせによって大きい数字を表すのに、より少ない音節数で済むわけである。

借用語のタイプとしては、語彙（単語）である場合がほとんどである。数字も単語であるので、タイプとしての条件も兼ね備えていると言える。

参考文献

- Anttila, Raimo. 1972. *Historical and comparative linguistics*. Amsterdam : Benjamins.
- Arlotto, Anthony. 1972. *Introduction to historical linguistics*. Boston : Houghton Mifflin Company.
- Bynon, Theodora. 1977. *Historical linguistics*. New York : Cambridge University Press.
- Crowley, Terry. 1992. *An introduction to historical linguistics*. New Zealand : Oxford University Press.
- Haugen, Einer. 1950. The analysis of linguistic borrowing. *Language* 26 : 210-31.
- Hock, Hans Henrich. 1991. *Principles of historical linguistics*. New York : Mouton de Gruyter.
- Jespersen, Otto. 1938. *Growth and structure of the ENGLISH LANGUAGE*. New York : Doubleday Anchor Books.
- Lehmann, Winfred P. 1992. *Historical linguistics*. London : Routledge.
- Ruhlen, Merritt. 1987. *A guide to the world's languages*, vol.1 : Classification. San Francisco, CA : Stanford University Press.
- Dictionary of linguistics*. 1988. 田中春美編 成美堂
- International Encyclopedia of linguistics*. 1992. Bright William ed., New York : Oxford University Press.
- 『言語学大辞典 第6巻 術語編』1996年 三省堂